

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381069

研究課題名(和文) 幼稚園・保育所・認定こども園における学びや発達の評価指標の開発と検証

研究課題名(英文) Development and Verification of learning and development of children in kindergartens, day care centers, Centers for early childhood education and care.

研究代表者

岩立 京子 (IWATATE, Kyoko)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：40185426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果は、次の3点である。カリフォルニア州で開発されたDRDPの領域、指標と内容と、幼稚園教育要領等におけるねらい、内容を比較検討し、両者の構造化のレベルや、具体性、内容の排反性の違いなどを見出した。DRDPの一部を幼稚園及び保育所で使用し、評価を行ってもらったところ、保育者からは視点が整理され、評価の負担度が軽減するが、指標の数が多く、4段階で評価することが難しいと報告された。使用可能性が高いという結果が得られなかったため、日本が重視してきた非認知的発達と、認知的発達の相関関係をみる調査を行ったところ、非認知的発達を重視する日本の保育の中で、認知的側面も育っていることが実証された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop the new assessment indexes of the learning and development of children in early childhood and to verify the validity and reliability of the indexes. We translated DRDP(2010, 2015), DRDP-K into Japanese and made an analysis of commonality and difference between DRDP and educational purposes and contents in the Course of Study on Japanese Kindergarten, etc. The results shows (1)the indexes and contents of DRDP are more concrete and visible behavioral indexes as opposed that those in Japanese course of study are more mixed especially with social and emotional aspects, (2)the number of DRDP is too large for Japanese practitioners and felt it in a burden, while practitioners got the new points of view and could make an assessment of children without their bias, (3)As we couldn't find validity and reliability, we made an analysis the correlation between non-cognitive and cognitive skill. The results showed the significant correlation between them.

研究分野：幼児教育

キーワード：幼児 学びや発達 評価指標 カリフォルニア DRDP

1. 研究開始当初の背景

(1) 保育・幼児教育が、生涯の学びや発達
の基盤となることは、保育の実践者や保育に
関わる研究者だけでなく、今日、教育行財政
に関わる経済学者等によって認識されてき
ている(OECD, 2001, 2006, 2010)。また、乳
幼児期への投資が対費用効果の観点からも
重要な要因であり(Heckman, 2000;
Heckman et al., 2006) 保育・幼児教育の質
が人生の成功の基盤となることを示すエビ
デンスが諸外国で蓄積され、国際的にも注視
されるようになった。そのような傾向を受け
て、保育の質を評価する指標や尺度の研究が
多くの国で行われるようになった。保育の質
を高めるためには、まずは、保育の質のアセ
スメントが欠かせない。この研究を開始した
当初、わが国でも、保育の質やそのアッセ
メントが着目され始めた頃で、指標に関する
研究はほとんど見られなかった。

(2) 一方、教育の場で学校評価等の評価が
導入され、保護者や地域住民はもとより、広
く社会に対する説明責任として教育の営み
や過程、子どもの学びや発達をどう可視化し
ていくかが問われるようになった。しかし、
保育・幼児教育の成果としての学びや発達を
どう読み取り、可視化していくかについては
ほとんど焦点が当てられてこなかった。小学
校以降の学校教育においては、量的、質的な
学力の評価が重要であり、教育心理学や教育
学の領域においても教育評価が主要なテー
マとなっていた。しかし、遊びや生活を通し
た総合的な指導を通して行われる幼児教育
において、学びや発達の理解や、それに基づ
く指導や援助の重要性は自明の理であった
が、幼児教育の専門外の人々によっては、
それは理解されず、ほとんど議論されてこ
なかった。

その背景として、日本の幼児教育の目標が
教育の成果としての発達や学びではなく、教
育の過程そのものあるいは、過程における心
情・意欲・態度の育ち、すなわち、社会的情
動的な側面の学びや発達を重視しているこ
と、その姿を量的に測定し、可視化すること
が難しいこと、「評価」という言葉に対する
矮小化された考え方や偏見が影響としてい
ると考えられた。

そこで、本研究では、どのような保育者が
評価しても、ある程度、評価でき、それを用
いて発信できるような評価指標を、日本の幼
稚園教育要領等のねらい、内容と比較しなが
ら検討し、試行することにより、日本への適
用可能性を検証することを目的とした。

2. 研究の目的

カリフォルニア州において開発された
DRDP(Desired Result Developmental
Profile)は、保育者の日々の記録から子ども
の学びや発達を捉える尺度である。DRDP
(2010)は、カリフォルニア州教育省のため
に、WestEd とカリフォルニア大学バークリ

ー校評価とアセスメント研究所(BEAR)が
共同で開発したものである。2015年に、
DRDP(2015)へと改訂され、障害をもつ子
ども用のDRDP-accessなどが統合され、ユ
ニバーサルデザインになった。その後、カリ
フォルニア州の教育省は、the Early
Education and Support Division(EESD)、
Special Education Division(SED)、WestEd、
California大学バークリー校のBEARが共同
して、DRDP(2015)の発展版としてDRDP-K
を作成した。

本研究は、DRDPを用いて、以下の2点を
明らかにすることを目的とした。

(1) 日本において幼児理解の共通の指標で
ある幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼
保連携型認定こども園教育・保育要領のねら
い・内容(満3歳以降)とDRDP-PS(Desired
Result Developmental Profileのプレスク
ール版)(2010)やDRDP-Kの領域、指標、指
標の内容を比較検討し、それぞれの特徴を明
らかにすることを第一の目的とした。

(2) DRDP-PSを翻訳し、解説を加え、日
本の幼稚園等施設において、保育者に実際
に用いてもらい、幼児の学びや発達を評価し
てもらうことにより、その妥当性や信頼性(日
本への適用可能性)を検討することを第二の
目的とした。

(3) 研究開始当初、評価指標の信頼性、妥
当性の検証結果を元に、日本版の評価指標を
作成し、その意義や使用方法を学ぶ研修プ
ログラムを作成することを目的とした。しかし、
研究結果が得られ、日本への適用可能性が低
いということが証明された。そこで、遊びを
基本とした子ども中心の幼児教育・保育を実
践する園で、幼児の非認知的発達と、認知的
発達の関係をみる調査を行った。日本の保育
者は通常、伝統的に心情、意欲、態度という
非認知的発達を丁寧に見取っているが、言葉
や数などの認知的発達については、通常は読
み取っておらず、それらを意識した指導をし
ていないことも考えられた。躍動感をもって
遊ぶ幼稚園で非認知的側面が発達すると、そ
れに伴って、認知的な側面も発達してくるの
かを明らかにすることを目的とした。この調
査により、心情・意欲・態度、すなわち、学
びに向かう力や人間性等を重視する日本の
幼稚園等施設において、遊びや生活を通した
総合的な指導を行うことが、非認知的発達だ
けでなく、認知的発達の側面も促進している
ことが明らかになるだろう。

3. 研究の方法

(1) DRDP-PS(2010)を和訳し、その背景
や目的、ねらい、内容、使用方法と、日本に
おけるそれらとの比較分析を行った。DRDP-
PS(2010)の領域や項目数、内容と、
日本の幼児教育関連3法に見られる満3歳
以降のねらい及び内容を比較した。

(2) 幼児の姿の記録を元に、DRDP-PSの

一部を用いて幼稚園教諭と保育士に実際に幼児の発達や学びを評価してもらい、面接調査を通して、日本の幼稚園等施設における妥当性、信頼性、適用可能性を検討した。

(3) DRDP-PS と日本の幼稚園教育要領を融合した評価指標が作成できた段階で、その意義や使用方法についての研修プログラムの作成を目指したが、妥当性や適用可能性が低いことが証明され、幼稚園や保育士が DRDP-PS を用いて子どもの学びや発達を評価することは難しいことがわかった。そこで、日本の幼児教育において重視される社会的情動的発達、いわゆる非認知的発達(保育者の評定)と、欧米で重視される認知的発達(発達検査)との関係をみる調査を行った。幼児の非認知的能力は、John, O.P., & Srivastave, S.(1999)によるビッグファイブ因子のリストを参考に、ここに含まれる幼児の姿として、「自発性」「意欲」「集中」「興味」「協調性」「素直さ」を抽出し、そこに幼児期において大切な「生活力」を加え、11項目の尺度を作成した。保育経験20年以上の保育者に内容を検討してもらい、幼児教育において重要な非認知的発達の尺度とした。幼児の認知的発達については、語彙を PVT-R(絵画語彙検査)で、数の認識を K-ABC の数的推論の項目を用いて測定した。その他、関連要因として家庭環境等を尋ねた。なお、検査は個別で行い、協力者の園児のすべての親に対して説明し、検査へ参加する旨の承諾書を得た。

4. 研究成果

(1) DRDP-PS (2010) の領域や指標と幼稚園教育要領の領域、ねらい、内容と比較したところ、DRDP の領域の数は多く、2010年版が12領域、2015年版が8領域、DRDP-K 版は11領域であり、日本と比較すると発達の側面がより構造化されていた。日本の要領が、特定の領域であっても、他の領域のねらいや社会的情動的な発達が含まれた複合的な内容であるのに対して、DRDP-PS の

表1 DRDP の領域と指標

領域	指標
学びへの姿勢と自己抑制	注意の持続他、7つの指標
社会・情動の発達	他者との関係における自己の識別他、5つの指標
言語とリテラシーの発達	言語の理解他、10指標
認知(数・科学を含む)	空間関係他、11指標
身体の発達と健康	感覚・運動スキルと運動の概念他、10指標
時空間・社会とのかかわり	時間の感覚他5指標
表現活動	ビジュアルアート他、4指標
英語の発達	英語の理解(受け手側の英語)他、4指標

項目は、学びや発達の各側面により焦点化さ

れた内容であった。DRDP は、領域と指標の数が多く、表1の通りであった。カリフォルニア州は、移民が人口の5割を超えており、英語学習者の領域が設けられていた。

また、DRDP-K と幼稚園教育要領のねらいと内容を比較した結果、図1のように、DRDP-K が、その領域に特化した指標、例えば、身体運動領域であれば、「ものを操作するために、腕、足、体を調整して、順番に、あるいは同時にいくつかの動きを組み合わせる」など、身体運動に特化した指標となっているが、日本の幼稚園教育要領の健康領域の内容の場合、「様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む」「・・・進んで運動しようとする」等、成果として運動ができるというよりも、遊びや生活の過程における情動や主体の動き等が含まれていた。

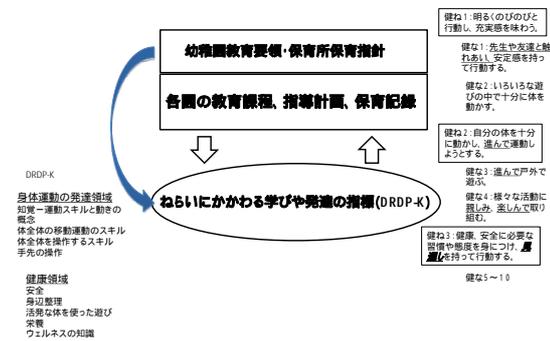


図1 幼児教育のねらい・内容と、学びや発達の領域、指標(DRDP-K)

(2) 幼稚園、保育所で、DRDP-PS の一部を実施し、その直後に保育者に面接調査を行ったところ、保育者は、「指標があることで記録の偏りが防げる」「課題が明確になり援助の手立てを考える上で役立った」「DRDPを用いて発達の指標の項目ごとに記録を整理したことで、現在の発達の具体的な状態が明らかになった」のように視点がより構造化され、客観的に理解できたというメリットを感じたようだ。一方で、「項目数が多く、負担となった」「記録方法に慣れていないので、やりにくかった」「指標が頭に入っていなかったので指標を用いた記録がとれなかった」、また、「各項目が質的に異なる4段階で評価する手法を用いるDRDPが難しかった」、また、「記録の取り方を今までとは大幅に変えねば使用できないこと」等、大変さが報告された。

日本の保育は、遊びや生活を通した総合的な指導をとおして、多様な学びを読み取っていくが、それは力量の高い教師にとっても難しいことである。DRDP のように整理され、～のような姿を読み取ってほしいという期待を学ぶことによって、読み取りやすくなると思われた。すなわち、視点が整理され、子どもの学びや発達が客観的に構造化されて理解しやすくなる反面、幼児の学びとして、知識・技術・行動を重視するDRDPの指標と、

心情・意欲・態度を重視する日本の評価視点との間のギャップが明らかになり、両者の融合から、日本で用いる評価指標の作成が難しいことが明らかになった。

(3) 日本が伝統的に重視してきた社会的情動的発達、いわゆる非認知的発達と、アメリカで重視される認知的発達との相関関係をみた。非認知発達の項目は、4歳児において、「共感する」「折り合いをつける」「我慢する」などが、また、5歳児においては「自発性」や、「思ったことを友達に言葉で伝える」ことなどが語彙の発達と有意に相関していた。また、4歳、5歳共に、数の認識の発達と、「最後までやり遂げる」「思ったことを友達に言葉で伝える」ことが有意に相関していた。このことから、遊びを基本とした、子ども中心の幼稚園で、子供が主体感を持って、遊び込んでいくとき、語彙や数のトレーニングをしなくても、非認知的発達と認知的発達は相互に関連し合いながら、発達することが明らかにされた(表2)。さらに、認知的発達は、3歳では、検査の平均の値と差はなかったが、4歳、5歳になるにつれて、平均の値より、高くなる傾向がみられた。これは、質の高い遊びや生活を通じた総合的な指導を通して、非認知的発達が高まるにつれ、認知的発達の伸び幅が大きくなる可能性が示唆された。

表2 非認知能力の評定(平均値と標準偏差)

	3歳(N=99)	4歳(N=143)	5歳(N=147)
遊びや生活の中で自発的な姿がみられる	1.24(.43)	3.02(.82)	3.86(.70)
遊びや生活において最後までやりとげようとする姿がみられる	1.03(.17)	2.80(.77)	3.70(.67)
遊びなどで集中して取り組む	1.12(.33)	3.02(.70)	3.73(.59)
物事を明るく楽観的に捉える	1.08(.27)	2.78(.78)	3.51(.79)
友達と一緒に協力することができる	1.00	2.64(.76)	3.64(.72)
大人に言われたことを素直に受け入れる	1.11(.32)	2.90(.75)	3.88(.73)
友だちの気持ちに共感することができる	1.00	2.64(.75)	3.59(.68)
友達と折り合いをつけることができる	1.00	2.55(.78)	3.39(.81)
思ったことを言葉で友だちに伝えることができる	1.06(.24)	2.68(.82)	3.56(.71)
必要なときにはがまんすることができる	1.04(.20)	2.74(.83)	3.74(.78)
生活力がある	1.27(.45)	2.87(.79)	3.73(.79)

<引用文献>

Heckman, J. 2000 "Policies to foster human capital." *Research in Economics*, 54 (1), 3-56.

Heckman, J., Jora, S., Serigo, U. 2006 "The effects of cognitive and noncognitive abilities on Labour Market outcomes and social behaviors." *Journal of Labour Economics*, 24(3), 411-482.

John, O.P., & Srivastave, S. 1999 The Big-Five trait taxonomy: History, Measurement, and Theoretical perspective. In L. A. Pervin & O.P. John (Eds.). *Handbook of personality: Theory and research*(vol.2, pp.102-138). New York: Guilford Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

室井真紀子・岩立京子(2018) 幼児教育における子どもの発達理解の新たな指標と評価 - DRDP (Desired Result Developmental Profile) を用いて - 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 第69集 119-127 査読無.

榎本千里・岩立京子・西坂小百合・松井智子・岩立志津夫(2017) 乳幼児期の発達や学びの評価の検討: 言葉の領域に焦点をあてて 岡山県立大学保健福祉学部紀要 第24巻 第1号 67-80 査読無.

岩立京子・西坂小百合・松井智子・榎本千里・岩立志津夫(2017) カリフォルニア州における学びや発達の評価指標の分析 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 第68集 109-118 査読無.

西坂小百合・岩立京子・松井智子(2017) 幼児期の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係 共立女子大学家政学部紀要 第63号 135-142 査読無.

[学会発表](計6件)

西坂小百合・岩立京子・松井智子・榎本千里・岩立志津夫(2017) 保育者と保護者による幼児の非認知能力の評価 日本発達心理学会第28回大会

Iwatate, K., Nishizaka, S., Kusumoto, C., Matsui, T., & Iwatate, S. (2016) The relationship between non-cognitive and cognitive development in the high quality kindergarten. The 31st International Congress of Psychology.

岩立京子(2015) 幼児教育の評価指標の検討 -カリフォルニア州の DRDP システムから- 日本発達心理学会第26回大会 榎本千里・西坂小百合(2015) 保育記録から見る子どもの学びや発達の評価指標 日本保育学会第68回大会

榎本千里・西坂小百合・岩立京子(2015) 幼児教育の評価指標の検討 カリフォルニア州 DRDP と幼稚園教育要領領域「言葉」の比較検討 日本教育心理学会第57回総会

西坂小百合・榎本千里・岩立京子(2015) 幼児教育の評価指標の検討-カリフォルニア州 DRDP と幼稚園教育要領「人間関係」の比較検討-日本教育心理学会第57回総会

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩立 京子(IWATATE, Kyoko)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：40185426

(2) 研究分担者

樟本 千里 (KUSUMOTO, Chisato)
岡山県立大学・保健福祉学部・講師
研究者番号：10413519

西坂 小百合 (NISHIZAKA, Sayuri)
共立女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：50442116

岩立 志津夫 (IWATATE, Shizuo)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：80137885